

201410 北助松商店街 小樽研修

みのや社長

- ・小樽市で昆布店 4 店舗
- ・130 年前の建物を移築
- ・20 年前 北市硝子
- ・80%が外部資本。今でも60%が外部資本
- ・樽僑
- ・戦争で、備蓄石蔵がたくさん作られた
- ・あるとき、市長室に5店舗呼び出され、21時まで営業しろと言われた
- ・小樽を救うのは観光産業だと市長は思っていた
- ・市職員はそんなこと一切思っていない
- ・ヒステリー症候群
- ・何かを標的にしないと落ち着かない
- ・日本は一番女性が大切にされている
- ・世界中で奥さんが財布を握っているのは日本くらい
- ・堺市は信長以前は独立国のような感じで栄えていた
- ・最大のまちづくりだった
- ・商店街が地方都市で成り立つには原則がある
- ・原点
- ・店主が2階に住む
- ・お互い買い支え
- ・土日に人が来る
- ・経営者が郊外で買い物。
- ・5年前に若手が商店街組合をつくった
- ・30年前に北一硝子
- ・北海道はニシンで栄えた町
- ・漁業、酪農は10年経たないと軌道に乗らない
- ・奥地で電気が必要
- ・ランプ、ガラスが栄えた
- ・北一硝子にぶらさがる、コバンザメ商法
- ・6割以上は今でも外部資本。店主はほとんど外の人
- ・住人は300人いるかいらないか
- ・若者、よそ者、馬鹿者（＝ほら吹きもの）がいる
- ・戦後、うそとほらを一緒にしてしまった
- ・坂本龍馬、後藤新平（大風呂敷）、吉田茂
- ・だんな衆がいなくなった。

- ・ 寄付してくれる人がいた
- ・ どこで線を引くか
- ・ おいこら交番
- ・ 15歳若返るふりかけ→でたらめ
- ・ 150歳若返るふりかけ、よく売れる
- ・ ごりらの鼻くそ→許可しなかった。品がないから
- ・ 品位は大切

佐々木社長

- ・ 職人の会 22年
- ・ 24名に声掛け
- ・ +6名（日本一の職人と自負するものといったら来た）
- ・ 世界大会やった
- ・ 組合のつながりはあるが、異業種の集まりはなかった
- ・ うちの商店街に来ないと、〇〇がなかった
- ・ 努力しなくても人が来た。
- ・ 老人中心の商店街になる
- ・ 政府も補助金を出したがっている
- ・ ほとんど無利子
- ・ どんどんと使うべき
- ・ 発想の転換が必要
- ・ コーヒーカップ
- ・ たたけば楽器、われれば武器
- ・ 下はお店、上は老人の住まい

木村先生

- ・ まちづくりは、産業歴史文化に磨きをかけて小樽から世界へ発信
- ・ 未来の担い手（愛着シン）
- ・ 5か年計画
- ・ 広報ではなく、広聴からはじめろ
- ・ 広聴広報
- ・ 例えば、ワールドカフェ
- ・ ①全員が発言 ②よく聴く！ ③批判するな！ ④リラックスした環境づくり
- ・ ⑤話はシンプルに ⑥結論は出すものではない
- ・ やねだん
- ・ 理解得るために数値化

- ・まちから一人抜けたら、121万円の消費購買力が落ちる
- ・総合計画
- ・ポイント：人口推計
- ・先取り政策
- ・リーダーとプロデューサー
- ・自ら知り気付く機会
- ・住民から住民へ、そして市民へ
- ・五感六育
- ・食育：4つ
- ・8歳までに8000 下のザラザラ 小脳
- ・12歳までに12000 下のザラザラ 大脳
- ・その後は減るしかない
- ・日本には4つ+旨味がある
- ・ポイントは小中高の先生